

地中海古代都市の研究 (124)
古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008 (2) 出土部材9. 建築歴史・意匠-6. 西洋建築史
ギリシア メッセネ 劇場正会員 ○中之丸諭志*² 同 伊藤 重剛*¹ 同 吉武隆一*³
同 林田義伸*⁴ 同 谷皓司*² 同 國竹真由美*⁶
準会員 足立義幸*⁵

1. はじめに

本稿では前稿に引き続き、メッセネの古代劇場について、出土部材についてその概要を報告する。

メッセネの古代劇場からは、膨大な量の部材が出土している。その大半は座席を構成していた部材で、数百個出土している。そのほかに、スケーネ（舞台建物）のスカエナエ・フロンス（舞台建物の前面部分）を構成していたと思われる円柱の礎盤、柱身、柱頭、アーキトレヴ、ゲysonなども大小合わせて百個あまり出土している。

出土状況は、スケーネの前面に壊れた円柱部材や、ゲysonなどがかなり乱雑な状態で散乱し、また座席部材は殆ど全て取り去られていたので、キリスト教時代に異教の建築として、組織的に破壊されたことを物語っている。発掘後は、こうした部材は整理された形で1箇所を集められている。

筆者らは2008年夏の調査で、スケーネのものと思われる円柱部材などを実測したので、これらの概要を報告する。調査はまだ始まったばかりで部材の全てを実測したわけではないので、最終的な結論というわけではないが、今年の段階での成果報告とする。¹⁾ 実測には、曲尺、鋼尺、コンベックスなどを用いて全くの手測りで行い、図面は1/10で作成した。

2. 出土部材概要

2-1. 円柱柱身部材

円柱部材は、柱頭、柱身、礎盤それぞれが別の部材で作られている。円柱は全ての部材が揃って一本として完結したものではなく、特に柱身の大半は少なくとも3つないし4つの部分あるいはそれ以上に割れた状態で出土した。またこのことは断片のいくつかには再利用のために、割ろうとして掘られた溝が観察されることからわかる。現在はメッセネ考古学協会により、接合可能な部分は接合され、数本が一本の柱身として復元されている。

今回実測した柱身は9本で、施工精度は悪くないが、風化によって削られたと見られる部分もあり、同じ高さ

の部位でも方向によってわずかに直径が異なるものもある。最も大きい柱身は、高さ4.068 mで下部直径0.516 mであり、比率にして1:7.88である。(8) 柱頭と礎盤を入れると、おそらく円柱の高さの比率は下部直径の9~10倍ほどであったろう。最も大きい柱は、おそらくスケーネの3箇所にあるニッチに使用されたもので、残りの小さな円柱はスケーネの壁を背後にして2層ないし3層に並んだ列柱を構成したものであろう。

円柱は、他のローマ劇場のスケーネに見られるように、カラフルな石材が使用されている。石材の材質は以下の7種類に分類される。1) 灰色花崗岩、2) 赤白の斑模様の大大理石、3) 赤白の縞模様の大大理石、4) 薄緑の縞模様の大大理石、5) 灰色大大理石、6) 砂岩状粒子のある大大理石、7) 白色の結晶質大大理石。中でも赤白の縞模様の大大理石、薄緑の縞模様の大大理石は非常に美しく、客席から舞台をみると一際目をひいたものと考えられる。

柱の全体形状は、下部から中ほどにかけてほぼ同じ太さで続き、上部は次第に太さが低減している。上面にはダボ穴があげられ、鉛を流し込む溝がつけられており、また下面にもダボ穴がある。

柱身部材はその大きさで、4種類に分けられる。具体的には、高さについては、1) 4 m強、2) 3.5 m、3) 2.9 m、4) 2.3 mであり、下部直径に対する高さの比は、7.1~8.1の範囲であり、高さが高いほどこの比は小さくなっている。

2-2. 柱礎

実測を行った柱礎は全部で15個である。大きさは大小さまざまで、すべて大大理石造である。柱礎は劇場の中から出土したことは当然だが、アゴラに隣接するバシリカ式教会堂にも再利用されているようだ。礎盤はアッティカ式で、下段に正方形もしくは円形のプリンスをもっている。(図5,6,7) しかし、それ以上分類するのは、明らかに寸法が大きいNo.53と東側にニッチにin-situの状態出土したNo.X1、No.X2(図4)は明確に分けられるが、そのほかは寸法の誤差なのか、バラつきが大きく

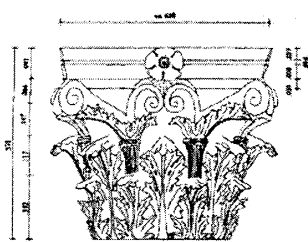


図1 コリント式柱頭 No. 808

表1 コリント式柱頭寸法表

部材番号	上面幅	下面直径	部材高さ	部材幅
No.808	ca.0.630	ca. 0.400	0.571	ca. 0.630
部材番号なし	不明	ca. 0.400	ca. 0.562	不明

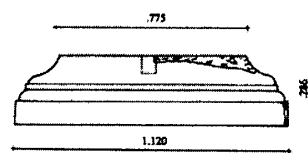


図4 柱礎 No. X2

表4 矩形礎盤寸法表

部材番号	部材高さ	礎盤高さ	プリンス高さ	プリンス幅	上面幅
No.63 + 64	0.377	0.234	0.143	0.665	0.555
No.119	0.297	0.188	不明	0.647	0.512
No.817	0.270	0.158	0.104	0.695	0.579
No.819	0.265	0.154	0.111	0.570	不明
No.818	0.223	0.144	0.077	(0.558)	(0.410)

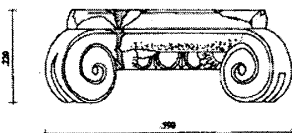
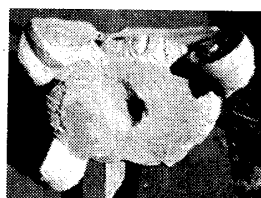


図2 イオニア式柱頭 No. 11085

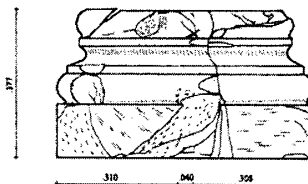


図5 柱礎 No. 63+64

表2 イオニア式柱頭寸法表

部材番号	上面幅	下面幅(直径)	部材高さ	部材幅
No.1912	0.450	0.416	0.222	0.550
No.11085	不明	0.408	0.220	0.590
No.1910	0.506	0.358	0.221	ca. 0.590
No.1911	0.463	0.347	0.153	0.463
No.1423	0.493	0.345	0.258	不明

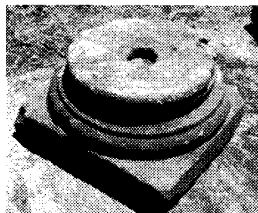


図6 柱礎 No. 108

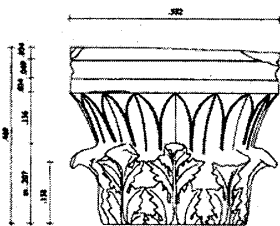
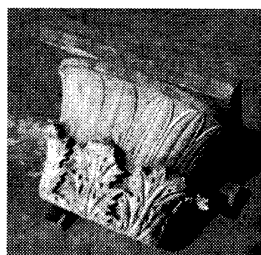


図3 ペルガモン式柱頭 No. 102

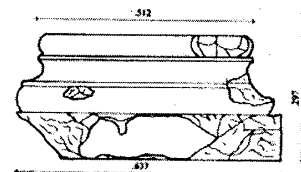


図7 柱礎 No. 119

表3 ペルガモン式柱頭寸法表

部材番号	上面幅	下面直径	部材高さ	部材幅
No.T11	0.810	0.570	0.662	0.810
No.1905	不明	ca. 0.420	0.441	不明
No.1906		ca. 0.420	0.445	
No.1908	0.590	0.402	0.515	0.590
No.1909	0.556	0.396	0.496	0.556
No.14	0.547	0.374	0.425	0.547
No.102	0.552	0.370	0.460	0.552
No.1101	0.465	0.311	0.363	0.465
No.1100	0.467	0.310	0.395	0.467
No.971	0.593	不明	0.500	0.593

表5 円形礎盤寸法表

部材番号	部材高さ	礎盤高さ	プリンス高さ	プリンス幅	上面直径
No.53	0.456	0.302	0.154	(0.924)	0.726
No.T8	0.220	0.144	0.076	0.576	0.498
No.1115	0.321	0.185	0.136	0.610	0.486
No.(T5)	0.281	0.159	0.122	0.572	0.456
No.108	0.273	0.165	0.108	0.580	0.450
No.T17	0.318	0.180	0.133	0.535	0.436
No.T10	0.293	0.173	0.120	0.573	不明
Base(east) 1	0.266	0.176	0.088	1.104	0.765
Base(east) 2	0.286	0.188	0.097	1.120	0.775
No.T18	0.283	0.193	0.090	0.728	0.580



図8 柱身 No. 11+12+1398

表6 柱身寸法表 (m)

部材番号	高さ	上部直径	下部直径
No.100+100a	4.068	0.439	0.516
No.11+12+△5/189+1398	4.034	0.462	0.507
No.70+92	4.012*	0.460	0.516
No.3+3α	3.524	0.380	0.433
No.809+1236	2.906	0.347	0.376
No.10+34+47+?	2.870	0.315	0.375
1400+1512	2.392	0.289	0.337
No.44+804+1409*	2290*	0.400	*
No.16+34*	1.740*	不明	0.317

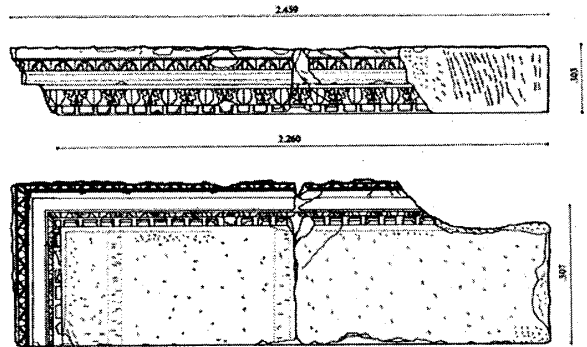
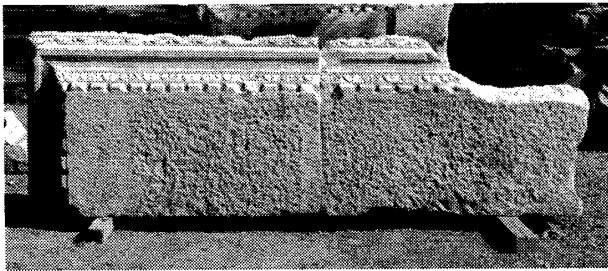


図9 ゲイソン No. 2

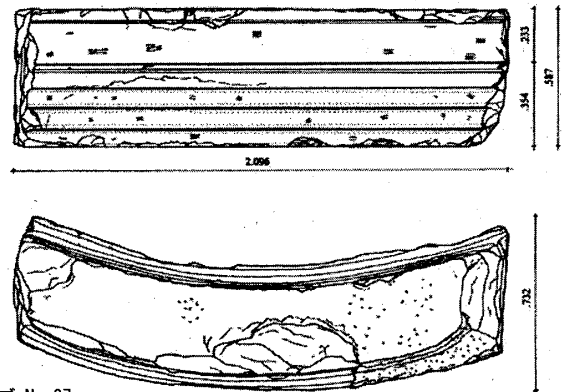
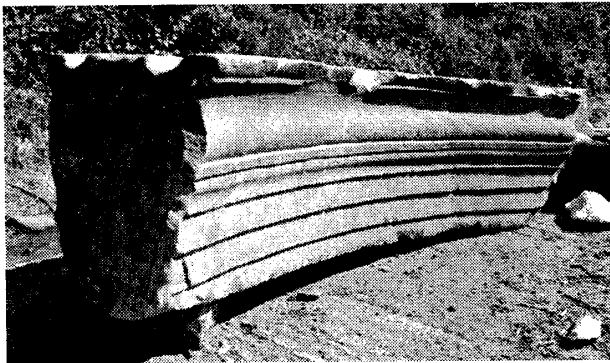


図10 アーキトレープ No. 27

分類できない。

プリンスの高さは、礎盤部分の高さの比と関係なく様々である。上面中央に上に乗る円柱を支える大きな円筒形のダボ穴がある。ダボの横には、鉛を流し込む銅線が深く刻まれている。底面にはダボが3つあるものもあれば、全くないものもある。

以上の円柱をのせた柱礎のほかに、矩形の礎盤が5個出土している。この礎盤はおそらく円柱の下の方形のペダスタルの下に置かれていたものと思われる。これも寸法にバラつきが多く、グループ化するには無理がある。

2-3. 柱頭

実測を行った部材17個である。柱()頭は、コリント式、イオニア式、ペルガモン式の3種類で、いずれ

も大理石でできている。コリント式は2個であるが、大きさは同じで1種類である。(図1)イオニア式は5個あるが、下面直径で2種類に分かれる。うち1個は渦巻きが両側についたギリシア式の柱頭であるが、他は渦巻きが4隅についているだけである。(図2)上端部には卵鏃装飾(egg-and-dart)がついている。中にはこの卵鏃装飾が4辺全てにあるものと、4辺の内の1辺の装飾を省いているものがあり、装飾のない部分は人目に触れない裏側にくるよう配置されたと思われる。

ペルガモン式はコリント式ほど装飾が豊かでないが、8枚のアカンサスの葉の上に、16枚の椰子の葉が放射状に並んでいる。(図3)おそらくコリント式を主要なところを持って行き、ペルガモン式はコリント式の代用として使われていた可能性がある。

2-4. アーキトレヴ・フリーズ

アーキトレヴとフリーズは、ひとつの部材として作られている。実測を行なった部材は7個である。アーキトレヴ部分は3段のファスキアに分かれており、上部のフリーズ部分には彫刻はなく、下部が凸形で上部が凹形のS字状の断面になっている。部材の種類は、高さで分けて3種類に分けられる。形状は長方形のものと円弧状のものに分けられ、円弧状のものはNo. 71のように半円形をしている中央のニッチの上に架けられたものと考えてよいであろう。(図10)

ファスキアの段差部分には、アストラガルスが彫られているものや、また底面には縄目模様や葉模様が彫られているものも観察される。

2-5. ゲイソン

ゲイソンは、もともとギリシアの建築様式の軒に相当するものであるが、スケーネのスカエナエ・フロンスにおいては、垂直方向の円柱の列の上に乗った水平材のアーキトレヴの上に、さらに前方に突出してその下に影を落とす強い水平線を演出する部材である。

実測したのは全部で10個で、高さの違いや装飾の有無で3種類に分けられる。最も大きいのは高さ0.4m前後、その次が高さ0.3m前後で、これらの二つには、中ほどの突出部より上に心鏃紋様(heart-and-dart)、それより下に葉舌装飾(leaf-and-tongue)が付けられている。(図9)最も小さいのが高さ0.25m前後で、これには装飾はつけられていない。装飾部分は、風化によってやや削れてしまっているものもあるが、大半は明確に残っており、それぞれの装飾には、多少ではあるが寸法に誤差がある。また、ゲイソンの上面は多くが粗い仕上げで、かつ前方に傾斜しており、これは水切りのためと考えられる。

3. まとめと今後の課題

ローマ劇場のスカエナエ・フロンスは舞台の背景となり、役者がそこから舞台に登場するところでもある。実用的というより劇の背景として、劇を引き立たせる全く装飾的なもので、多数の円柱を豪華絢爛なものである。したがって、この劇場のスカエナエ・フロンスでも、部材は色大理石などの華やかなものを使用しており、建築

自体も非常に装飾的に作られているのが、観察された。

部材は花崗岩でできた大きい円柱の2本を除き、大理石でできている。大理石は肌理が細かく、細かい細工ができる石材であるが、この部材の精度はそれほどよくなく、同じであるべきであろう部材の寸法にもバラつきが観察され、細かい点の加工についても若干の粗雑さが見られる。したがって、部材をその寸法で分類を行なうには多少限度が感じられる。建築的には、細かい部分に至るまでの精度の高さを見せるのではなく、建物全体の装飾的なイメージを優先したものと思われる。

調査はまだ始まったばかりで、今後は残った出土部材について実測をさらに進める必要がある。そして上部構造の復元的研究を行なうために、他の劇場のスケーネと比較する必要がある。

謝辞 本研究は、学術振興会科学研究費基盤(S) 課題番号20226012によって行なわれた。

注

1) 劇場の発掘は、1990年代の後半から座席部分に体積した土砂の排出から序々に始められ、かなりの部分終了している。2008年の段階で、スケーネの両側のパラスの部分で発掘が進められている状況である。

*1 熊本大学大学院自然科学研究科教授 工博

*2 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程1年

*3 国立館大イラク古代文化研究所 共同研究員 博士(工学)

*4 都城工業高等専門学校教授 工博 博士(工学)

*5 熊本大学工学部環境システム工学科 4年

*6 国立館大イラク古代文化研究所 学術

Prof., Dr.Eng. Kumamoto University
Student, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University
Researcher, Dr.Eng. The Institute for Cultural Studies Ancient Iraq, Kokushikan University
Prof., Dr.Eng. Miyakonjo National College of Technology
Undergraduate Student, Faculty of Engineering, Kumamoto University
Researcher, Ph. D. The Institute for Cultural Studies Ancient Iraq kokushikan University